

世界文学大図鑑

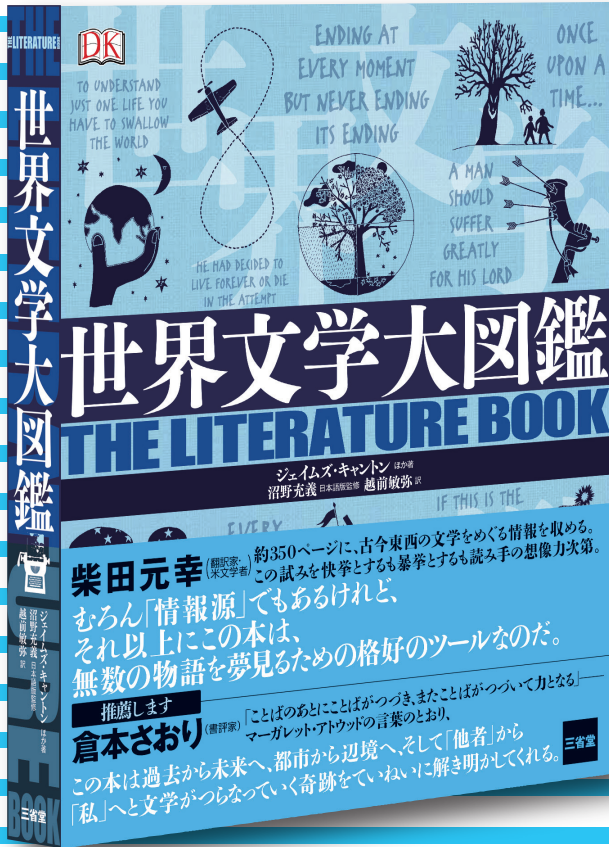


ジェイムズ・キャントン
沼野充義 日本語版監修
越前敏弥 訳
ほか著

BOOK

文学を愛するすべての人に 次の一冊をさがしているあなたに贈る オールカラーの図解入り大図鑑

- ◆古今東西の「世界文学」の主な潮流を、オールカラーの図版満載でわかりやすく解説。
- ◆本編で扱う100編あまりに加え、「もっと知りたい読者のために」でさらに200編を超える作品を紹介。



世界には私たちが
まだ読んだことのない、
面白そうな本がたくさんある。

沼野充義 (日本語版監修にあたってより)

B5変型判 352ページ 定価(本体4,200円+税)

何か惹かれるものがあつたら、この本を読みかけにしてもまったくかまわないから、ぜひその作品を
すぐに入手して読みはじめてもらいたい。そして、その作品のおもしろさをだれかに伝えてもらいたい。
越前敏弥 (訳者あとがきより)

目次より抜粋

- ◆英雄と伝説(紀元前3000年～後1300年)
他人の傷を自分への警告とせよ(『ニヤールのサガ』)
- ◆ルネサンスから啓蒙主義へ(1300年～1800年)
人はみな、おのれの所業の子である(セルバンテス『ドン・キホーテ』)
- ◆ロマン主義と小説の台頭(1800年～1855年)
みんなはひとりのために、ひとりみんなのために(デュマ『三銃士』)
- ◆現実の生活を描く(1855年～1900年)
人類はおろか、一国民の生活でさえ、そのまま記述することは不可能に思える(トルストイ『戦争と平和』)
- ◆伝統を破壊する(1900年～1945年)
若いころは、わたしにもたくさん夢があつた(魯迅『呐喊』)
- ◆戦後の文学(1945年～1970年)
一方の手の指で永遠に触れ、一方の手の指で人生に触れることは不可能である(三島由紀夫『金閣寺』)
- ◆現代文学(1970年～現在)
あなたはイタロ・カルヴィーノの新しい小説を読みはじめようとしている(カルヴィーノ『冬の夜ひとりの旅人が』)

三省堂

背景
キーワード
ディストピア

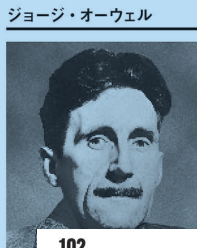
前史
1516年 イギリスのトマス・モア卿の『ユートピア』が、理想的な社会と逆の社会(ディストピア)を描く。
1924年 ロシアの作家エヴゲニー・ゼンナヤの『われら』が、集団利益のための単一国家を描く。
1932年 イギリスの作家オグダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』では、個人の特質が抑制される。
後史
1953年 アメリカの小説家レイ・ブラッドベリの『華氏451度』では、書物が禁じられて焚かれる。
1962年 イギリスの作家アントニー・バージェスの『時計じかけのオレンジ』が、暴力が蔓延する世界を描く。
1985年 カナダの作家マーガレット・アトウッドによる『侍女の物語』では、キリスト教原理主義の独裁政権が支配するアメリカが舞台である。

ディストピア文学とは、ユートピア(理想的な、完璧な世界)とは対極にある悪夢のような社会像を描くジャンルである。1516年にトマス・モアの『ユートピア』が登場してから数世紀にわたって、さまざまな作家が専制国家(共産主義国家もファシズム国家も)、貧困、拷問、大規模な迫害、人心のコントロールといった題目を取りあげ、ディストピアを再現してきた。作家たちはディストピアの世界を利用して、人間がいかに不安の中核を探り、なんの抑制もなく物事が進んだ場合に起こりうる未来の姿を描き出した。たとえばマーガレット・アトウッドの『侍女の物語』(1985年)では、軍事政権が支配する世界を描き、そこでは女性はさまざまな権利を剥奪され、ただ子供を産むだけの存在と見なされている。

転換点
ディストピア文学はおもに想像上の未来に焦点を絞り、新たなテクノロジーと社会の変化により生じる恐怖を描くものが多い。20世紀には、核爆弾や劇的な

“
過去をコントロールするのは未来をコントロールするもの。
現在をコントロールするのは過去をコントロールするもの。
『一九八四年』”

気候変化のシナリオが引き起こす脅威が、ディストピアの強力な供給源となった。ジョージ・オーウェルの『一九八四年』は、最も有名な近代ディストピア小説である。この作品の出発点は、スターリン主義台頭に対する恐怖である。オーウェルは民主的な社会主義を信奉していたものの、一政党が全権を掌握するソヴェト連邦が出現したことを、社会主義とはほど遠いと考えていた。1936年のスペイン内戦で、スターリン支持派が味方であるはずの党派を攻撃して、反ソ連勢力が分裂するさまも目撃していた。



ジョージ・オーウェル
ジョージ・オーウェルは1903年にインドで、エリック・アサー・ブレアとしてイギリス人両親のもとに生まれた。イギリスで教育を受けたのち東洋でもどり、ビルマのインド帝国警察に入職する。1928年にパリへ移り、1929年にまたロンドンに移って『パリ・ロンドンどん底生活』(1933年)を執筆した。不況のあおりを受けた貧困を身をもって体験するために、オーウェルはイギリス北部のウィガンを訪れた。同じ年にアイリーン・オッシュネシーと結婚し、その後アトウッドの『侍女の物語』(1985年)で、

1941年にBBCに入社するも、1943年に退社。ふたたび執筆活動をはじめ、『動物農場』(1945年)を発表すると、すぐに大評判となった。同年、妻が急死し、オーウェルはスコットランドのジュラ島に引きこもって、そこで『一九八四年』(1949年)を書きあげた。1950年に肺結核により46歳で死去した。

ほかの主要作品
1934年 『ビルマの日々』
1936年 『動物農場』

参照 「カンテイド」96-97 ■「ガリヴァー旅行記」104 ■「すばらしい新世界」243 ■「華氏451度」287 ■「鐘の王」287 ■「時計じかけのオレンジ」289 ■「アルテミオ・クルスの死」290 ■「侍女の物語」335

オーウェルはすでに、そのような背信行為の暗然たる様子を中編小説『動物農場』(1945年)で描写していた。また、新たな作品のためのある種のひな型と言えらるものも手していた。それはロシアの作家エヴゲニー・ゼンナヤの『われら』(1924年)で描いた世界で、そこでは個人の自由はもはや存在しない。

『一九八四年』が描いているのは、プロパガンダを通して市民を操り、政治権力を維持するために真実を偽りと見なす全体主義社会である。ここで描かれているディストピア社会では、『動物農場』の最初に起こる革命で約束されたような希望が存在せず、また個人が大きな社会システムの中の単なる歯車となっていて、はるかに暗澹たる様相を示している。

歴史の終焉

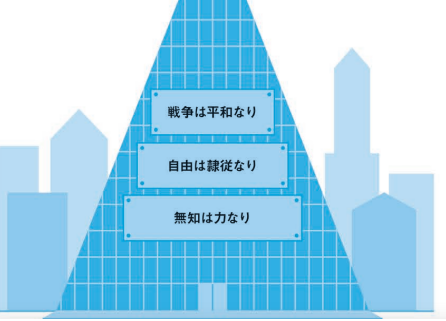
『一九八四年』の冒頭の文——「四月の暗れた寒い日で、時計が十三時を打っていた」——は、一日の時間構成の本質までもが変ってしまったという事実を淡々と突きつける。主人公のウィンストン・スミスがアパートメントの住人にはいる。スミスは第一エアストリップ(かつてのイギリス)の首都ロンドンの市民で、そこは世界核戦争後に存在する大陸をまたいだ三強国のひとつ、オセアニアの一区である。壁をめぐってすくすくは、「悲かな口説きたくね、いつかいつか整った日暮立をした四十五歳くらいの男」の肖像で、その「目がこちらがどう動いてもずっと追いかけてくる。その下には、ビッグ・ブラザーがあなたを見て

るリーダーである。スミスが住む世界はエリートに支配され、人口の85パーセントを占める大衆(「プロール」は、名称と実態がかけ離れた4つの省によって管理されている。4つとは、戦争を監視する平和省、治安を維持する愛情省、食糧配給を含めた経済を統括する調習省、そしてニュースや大衆教育を担い、プロパガンダを発行して人々の考えを統制する真理省、別名モニターがある。人々を統制するための主要な方策のひとつがニュースピークで、これは現在と過去の真実を定める真理省の言語であり、歴史は国家の強権政策の変化に合う

ように改変されて書きなおされる。ウィンストン・スミス自身も真理省で働き、歴史の記録を編集したり、オリジナルの文書を「記憶穴」に投じて焼却したりしている。歴史は停止してしまし、「果てしなくつづく現在のほかに何も存在せず、そこでは党がやがねに正しい。」

すべてを監視する政府
市民の密偵や盗聴をするために、テレスクリーン、監視カメラ、隠しマイクのネットワークが張りめぐらされている。これらは現政敵の保護を監督する思考警察によって運営されている。▶

真理省の役割は、人民を脅かし、恐れさせて従わせることにある。オーウェルは、真理省のビルは「巨大なドラゴンの建築」で、壁面には党の3つのソーラーンが掲げられていると描写している。



もっと知りたい読者のために

『デカメロン』
(1353年) ジョヴァンニ・ボッカッチョ

枠物語の構造を持つ『デカメロン』は、イタリアの作家、詩人、学者でもあるジョヴァンニ・ボッカッチョ(1313年～75年)が書いた100篇の物語集である。個々の話をまとめる枠になる物語は、女7人男3人の若者10人が、疫病の蔓延するフィレンツェを逃れてフィエゾレにほど近い魅惑的な邸宅で過ごす、というものである。一同は毎日全員がひとつずつ話をすと決め、そのようにして10日間わたって100話が語られる。その日の座長に指名される者が題目を選び、語られる話に向けての約束事を取り決める。毎日締めくくりにだれかがカンツォーネ(歌)を歌い、ほかの者は踊る。こうして精妙に書かれたため物語集ができあがり、悲劇の愛の物語やみだらな話から、人間の意志の力の話や女が男に仕掛ける計略の話に至るまでが集まった。これはルネサンス期とそれ以降の作家に刺激を与えた。

『ガウェイン卿と緑の騎士』
(1375年ごろ)

2,500行ほどで構成される『ガウェイン卿と緑の騎士』は、中英語の頭韻詩の例として非常によく知られている。作者不詳の、騎士道冒険譚の詩であり、舞台は伝説のアーサー王を頂く宮廷の初期に置かれている。美麗に綴られた魔法の物語は心理的洞察に満ち、英雄ガウェイン卿が謎めいた緑の騎士と出会うからつぎつぎと直面する試練と誘惑を詩の形で語っている。

『井筒』
(1430年ごろ) 世阿弥完満

作者の世阿弥完満(1363年～1443年)は日本を代表する能作者であり、能楽理論の大家でもある。この曲の題名は井戸のまわりの曲の由来し、曲全体は僧侶と里の女が出会う、女が僧に話を語るという枠構造になっている。ある男と女が幼いころ井戸で遊び、互いに惹かれて結婚する、という物語(伊勢物語)の挿話がかもとにある。

『アーサー王の死』
(1485年) トマス・マロリー

1485年にウィリアム・キャクストンによって印刷されたが、それより早い稿本は1470年ごろから存在していた。これは伝説のアーサー王と円卓の騎士たちの物語の集大成である。フランス中世騎士物語を

“
むき出しの美しい剣が
尖端だけ突き刺さっていた……
この石と鉄床よりこの剣を
引き抜いた者は、全イングランドの
正統なる王として生まれた者だ。”
『アーサー王の死』
トマス・マロリー

『アマデイス・デ・ガウラ』
(1508年)
ガルシロドリゲス・デ・モンタルボ

モンタルボ(1450年ごろ～1504年)がスペイン語で記した散文の騎士道物語『アマデイス・デ・ガウラ』が生まれたのはおそらく14世紀前半だが、最初に書かれた正確な時期や作者は不明である。4巻に及ぶモンタルボ版は、端整にして勇敢で心やさしい騎士アマデイスの伝説とオリアナ姫への愛を語っている。アマデイスは姫に尽くして騎士道の冒険に臨み、巨人や怪物を相手に恐れを知らぬ手柄を立てる。この作品の気高い理想や勇壮さや情感は、中世騎士物語の模範となった。

『アマデイス・デ・ガウラ』
(1508年)
ガルシロドリゲス・デ・モンタルボ

モンタルボ(1450年ごろ～1504年)がスペイン語で記した散文の騎士道物語『アマデイス・デ・ガウラ』が生まれたのはおそらく14世紀前半だが、最初に書かれた正確な時期や作者は不明である。4巻に及ぶモンタルボ版は、端整にして勇敢で心やさしい騎士アマデイスの伝説とオリアナ姫への愛を語っている。アマデイスは姫に尽くして騎士道の冒険に臨み、巨人や怪物を相手に恐れを知らぬ手柄を立てる。この作品の気高い理想や勇壮さや情感は、中世騎士物語の模範となった。

『旅船』3部作
(1516年、1518年、1519年)
シル・ヴィンセント

『旅船(バルカス)』3部作は、「ポルトガル演劇の父」と呼ばれる劇作家シル・ヴィンセント(1465年ごろ～1573年)による宗教劇である。1幕劇3部で構成され、『地獄への旅船』、『煉獄への旅船』、『天国への旅船』から成る。風刺と寓意を帯びたこの3部作は、ヴィンセントの卓越した創作の頂点とされるものであり、あらゆる階級を反映する船客たちの登場が、その大半が天国にはいこうとして不首尾に終わるさまを描いている。

『ウズルジアダス』
(1572年) リイス・デ・カモンイス

『ウズルジアダス』は10歌から成る叙事詩であり、大詩人デカモンイス(1524年～80年)がヴァスコ・ダ・ガマのインド航路遠征を順になどって物語った作品である。海人部とあつ、川の精への祈願と、国王バスターニアへの献辞が際立つと、つぎつぎと登場する語り手によって辞鋒が格調高く雄弁に語られる。ガマによってポルトガルの歴史が語られる箇所もあれば、冒険や嵐、さらにはギリシャとローマの神々による干渉の描写もある。作品全体がポルトガル人とその偉業への賛歌となっている。

『妖精の女王』
(1590年、1596年)
エドモンド・スペンサー

イギリスの詩人スペンサー(1552年ごろ～99年)の代表作である『妖精の女王』は、宗教的、道徳的、政治的寓意をこめた作

『失楽園』
(1667年) ジョン・ミルトン

ミルトンの最高傑作であり、リズムと響きの至高の偉業である叙事詩『失楽園』は、聖書にある物語に基づいて、アダムとイヴが転落し、それゆえ人類が神の恩恵を失ったと歌う。1674年の最終版で12巻(初版では10巻)構成になったこの詩は、ふたつの主題をからみ合わせている。ひとつは神と天国に対する悪徳の反逆であり、もうひとつはアダムとイヴが受けた誘惑とエデンの園からの追放である。

『ル・シッド』
(1637年) ビエール・コルネユ

5幕から成る韻文悲劇『ル・シッド』は、フランスの悲劇作家ビエール・コルネユ(1606年～84年)の作品であり、フランス新古典主義悲劇の代表作と見なされている。スペインの国民的英雄ル・シッドの物語に着想を得たこの作品は、ル・シッドが頭角を現す話と、未来の義侠に対して決闘を申し入れた話を語っている。決闘に臨んで主人公は、愛する女と家の名譽のどちらをとるかを選択を強いられる。

『フェードル』
(1677年) ジャン・ラシヌ

フランスの劇作家ジャン・ラシヌ(1639年～99年)が書いた感動的な悲劇『フェードル』は、フランス新古典主義を代表する傑作である。5幕から成る韻文劇で、ギリシャ神話からとった題材は、古典時代の劇作家エウリピデスとセネカがすでに作品にしていた。ラシヌ

『失楽園』
(1667年) ジョン・ミルトン

ミルトンの最高傑作であり、リズムと響きの至高の偉業である叙事詩『失楽園』は、聖書にある物語に基づいて、アダムとイヴが転落し、それゆえ人類が神の恩恵を失ったと歌う。1674年の最終版で12巻(初版では10巻)構成になったこの詩は、ふたつの主題をからみ合わせている。ひとつは神と天国に対する悪徳の反逆であり、もうひとつはアダムとイヴが受けた誘惑とエデンの園からの追放である。

『ル・シッド』
(1637年) ビエール・コルネユ

5幕から成る韻文悲劇『ル・シッド』は、フランスの悲劇作家ビエール・コルネユ(1606年～84年)の作品であり、フランス新古典主義悲劇の代表作と見なされている。スペインの国民的英雄ル・シッドの物語に着想を得たこの作品は、ル・シッドが頭角を現す話と、未来の義侠に対して決闘を申し入れた話を語っている。決闘に臨んで主人公は、愛する女と家の名譽のどちらをとるかを選択を強いられる。

『フェードル』
(1677年) ジャン・ラシヌ

フランスの劇作家ジャン・ラシヌ(1639年～99年)が書いた感動的な悲劇『フェードル』は、フランス新古典主義を代表する傑作である。5幕から成る韻文劇で、ギリシャ神話からとった題材は、古典時代の劇作家エウリピデスとセネカがすでに作品にしていた。ラシヌ

ジョン・ミルトン

イギリスの詩人ジョン・ミルトンの名を最も世に知らしめた『失楽園』は、英語で書かれた叙事詩の最高傑作と見なされている。ミルトンは1608年にロンドンのチーフサイドで生まれ、まだ学生のころから執筆活動をはじめた。しかし、1642年に国内で内乱が勃発すると革命を支持する政治活動に身を投じ、小冊子を作って宗教と市民の自由を擁護した。1649年にチャールズ1世が処刑されてイ

三省堂 〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03(3230)9411(編集)・9412(営業) <http://www.sanseido.co.jp/>

注文書	<p>NEW 世界文学大図鑑 ISBN 978-4-385-16233-1 定価(本体4,200円+税)</p>		<p>貴店名・帖合先</p>	<p>冊</p>	
	<p>シェイクスピア大図鑑 ISBN 978-4-385-16229-4 定価(本体4,200円+税)</p>				冊
	<p>シャーロック・ホームズ大図鑑 ISBN 978-4-385-16228-7 定価(本体4,200円+税)</p>				冊
	<p>お名前</p>				お電話番号
<p>ご住所 〒</p>					

※必要事項をご記入のうえ、最寄りの書店へお申し込み下さい。お客様の個人情報は本書のご注文のみに利用し、目的外の利用はいたしません。

三省堂